子どもたちに安全な地球を

「子どもたちに安全な地球を」
ホメオパシー
国際チャリティーカンファレンス
in つくば

ホメオパシー国境なき連携へ

日本ホメオパシー医学協会　初の世界大会を開催

第13回学術大会「ホメオパシー国際チャリティーカンファレンス」

一般社団法人日本ホメオパシー財団日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）は10月8日から3日間、つくば国際会議場で東日本大震災からの復興とホメオパシー創立者ハーネマンのために「ホメオパシー国際チャリティーカンファレンス」を開いた。世界7カ国のホメオパスが集まり「ホメオパシーで安全な地球を」がテーマに掲げられた。来場者は3日間で延べ約2000人。大会では海外のホメオパス7人が研究成果を発表した。由井寅子JPHMA会長はホメオパシーの国際機関の設立を表明。各国で蓄積された研究成果が統合され、ホメオパシーは世界標準の確立に向かっている。

地球をモチーフにしたビーチボールが次々にトスを繰り返され、場内を舞った。トスのたびにこだまする歓声に乗って、一人ひとりがボールの行方を見守った。場内に連帯感が軽やかに湧き上がる瞬間だ。カンファレンスは3日間とも、このセレモニーで始まった。今大会は東日本大震災を抜きに言及できない。JPHMAは震災時に即座に行動を起こし、ホームページを中心にホメオパシー対応のレメディー情報を開示した。由井会長は、連絡が取れる被災地の会員たちを励まし、〝それは言葉のレメディー〟として彼らをサポートした。さらに道路も完全に開通をしていない状況下で現地へ3回訪問し、物質の支援もした。これら一連の対応は迅速な活動であった。

由井会長は開会宣言で「震災があって日本は大変ですが、それでも明るく元気に皆で力を合わせてがんばろう！」と開催への決意を会場へ参加者にむけ呼びかけた。

国際カンファレンスである今大会では、ホメオパシーの各国の現状や、世界最先端のガン治療研究機関とのホメオパシー共同研究成果なども報告された。海外のホメオパス達が口々に評価したのは、JPHMAが各国で蓄積された知見を取り入れて、高水準のホメオパシーを教育・実践していることだ。

日本の国民医療費は36兆円を超え、3年連続で過去最高を記録した。政府が進める「社会保障と税の一体改革」が混迷するなかで、統合医療には近代医学の補完だけでなく、医療費抑制も期待されている。その意味で、ホメオパシーに統一水準を設けることは重要な課題だ。現在、国内ホメオパスは現在570人。JPHMA会員は1000人。ホメオパシー患者会「とらのこ会」会員は3万5000人。昨年新聞によるバッシング騒動があり、「荒唐無稽」とホメオパシーを否定する報道が流れた。しかし、大会は活気に満ち、200年歴史のある海外のホメオパシーの研究、日本におけるホメオパシーのさまざまな治癒症例などに会場の反応は大変肯定的であった。さらに、放射能問題を抱える日本において、環境・農業にホメオパシーが貢献できる可能性が報告された。来年は「愛と和」をテーマに第13回学術大会を東京で開催する。

全国ホメオパス 症例発表

小林眞理子氏

山内知子氏

安田真美野氏

片桐航氏

片上敦子氏

松尾敬子氏

麻野輝恵氏

堀田峰雄氏

症例報告では、JPHMA認定ホメオパス8人が難治ケースへのホメオパシーアプローチについて述べた。

片上敦子氏は「自閉症で通う特別支援学級から、一般の中学受験をして第一志望に合格」について報告。ホメオパシー療法によって、自閉症の子供が90まで下がったIQを120に回復させ、子供は第一志望の中学に合格した。「0歳児全身アトピー性皮膚湿疹のケース」を取り上げた松尾敬子氏は、レメディーを摂るたびに体中焼けただれたアトピーが回復していく症状回復の過程を写真で報告した。

片桐航氏は「発達障害・歩けなかった児童が歩けるようになったケース」に言及。言葉が増え、ダンスの手振りを覚え、他人に関心を示す様子を映像で紹介した。麻野輝恵氏がテーマにしたのは「膿で抑圧を排出したケース」。手の湿疹と脚の皮膚炎に苦しむ女性に対して、体内毒素を排出させ、症状を改善させた。

堀田峰雄氏は「セックス意識とホメオパシーの関連性―リウマチ様症状が改善したケース―」について報告した。パニック障害に罹った夫とリウマチの妻にレメディーを選択した。夫はパニックが消え、妻は性への罪悪感が健全に回復し、リウマチの症状がなくなった。山内知子氏は「尿管結石が排出できて手術を回避したケース」について40代女性の症例を報告。レメディーで1㌢台の結石が2回出て治った。

動物への症例報告では小林眞理子氏は「3ヵ月間歩けなかった犬が1回の遠隔QX測定と修正後の歩いたケース」を発表。1ヵ月入院しても歩けなかった犬がレメディー選択で、損傷組織の修正、代謝の改善、神経の修復が実現した。「酪農におけるホメオパシーのアプローチ」を報告したのは安田真美野氏。千葉県鴨川市の太田和牧場で乳房炎に罹った牛にホルモン剤の投与を止め、内分泌系のレメディーを選択した結果、受胎率が向上した。

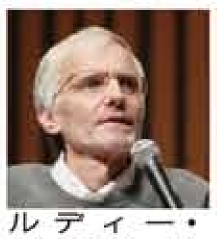
今年は一般からも登壇した。予防接種の問題を自身で調査、接種しないことを家庭内で決め、レメディーで対応した経験を報告。農業からは自然農にホメオパシーを活用、農業への展開が成功した例が報告された。放射能の土壌汚染が認められた福島でホメオパシーを応用した自然農で収穫された桃は放射性物質の検出限界値を下回り、甘みにも明らかな違いがみられたと報告した。

世界最先端のガン研究機関と連携

各国ホメオパスが見解発表

トレバー・ガン氏

エワルト・スットラー氏


ルディー・バースパー氏

ケイト・バーチ氏

プラサンタ・バナジー氏（右）とプラティップ・バナジー氏（左）

ジョージ・ディミトリアディス氏

ハーネマン研究の世界的権威である3人が初めて一堂に会した。ハーネマン・インスティテュート・シドニー創設者のジョージ・ディミトリアディス氏。治療体系「ダイナミック・レガシー」を確立した。カナダ在住のルディー・バースパー氏（オランダ出身）。「花びら理論」を開発したRAH英国本校教頭のエワルト・スットラー氏（オランダ出身）。

ディミトリアディス氏は「類似への道」と題して「同種の法則」に言及した。「有効なレメディーは自分の症状と共通点の多いレメディーだ」。バースパー氏は「ホメオパシーを超えて・ハーネマンの完全な医学体系の応用」を講演。「病気には根幹の病気と個々の病気の2種類があり、症状の発生パターンの把握が処方の根本」と説いた。「オルガノンと慢性病論に基づいたホメオパシー治療」を取り上げたスットラー氏は、「事故や流行病には植物由来と動物由来レメディー、慢性病には鉱物由来レメディーを処方する」と説明した。

ホメオパシーが西洋医学と融合した実績を述べたのは、インドのプラサンタ・バナジーとプラティップ・バナジーの医師親子。独自のレメディー投与法「バナジープロトコル」で、肺ガン患者を治療した症例を報告した。バナジー親子は米国テキサス大学MDアンダーソンガン研究センターとの共同研究を「国際腫瘍学ジャーナル」に発表。「従来の医療がホメオパシーを受け入れた」と明言した。

RAH英国本校副校長で生化学者のトレバー・ガン氏は「免疫発達の心理学と生理学、そしてホメオパシーの重要性」と題して、ホメオパシーが免疫力を高めることを指摘。ホメオパス北アメリカ協会副会長のケイト・バーチ氏がテーマにしたのは「小児期の発達と健康促進のためのノゾースの使用」。バーチ氏は、予防接種が免疫系にダメージを与え、発達障害を引き起こすことを報告した。

統合医療が必須

日本人医師が提言

陰山康成氏

酒向猛氏

自ら院長を務める高輪クリニックで西洋医療と東洋医療との「和合医療」を実践する医師・歯科医師の陰山康成氏。「和合医療におけるメンタルケア症例」について講演した陰山氏は「東洋医療は西洋医療の土俵に乗らない。互いに土俵を降りて話し合うのが和合医療」と主張した。陰山氏は自身もホメオパシーを医療現場で長い間使っている。「口の中は万病を引き起こす巣窟。前歯が腎臓、膀胱、泌尿器、生殖器の系統につながっているという発想は西洋医療にはない」。

セントマーガレット病院の外科医で統合医療担当医でもある酒向猛氏は「癌治療の現状と今後の展望」について問題提起した。酒向氏は外科・薬物・放射線の標準治療が「二十世紀末で限界に達した。標準治療ではガンの治療成績が上がることはもうない」と断言。ホメオパシー批判にも言及した。「科学的根拠がないというのが批判の定番だが、これは現代科学の定説のみを永久に正しいと信じる教科書信者である」。

今後のガン治療については「食事療法、運動療法とホメオパシーのような自然治癒力を高める方向性を持つ方法を取り入れた統合医療が必要だ」と提言した。

ホメオパシーで救われた

被災地会員、気高く前進

痛ましい報告に場内が一斉に息を呑んだ。「ただただ放射能におびえる毎日で、私は子供達に隠れ、台所で泣いていた」。福島市在住のJPHMA会員、阿部直美さんは涙声で苦境を回想した。「寅子先生と多くの仲間からのメールで励まされた」と謝辞を述べた阿部さんは決然と意志を表明した。「放射能に汚染されても、やはり福島が好き。福島の人達のためにホメオパシーを広めていきたい」。

同じく福島市の会員、八巻美幸さんは、先輩会員や同期のホメオパスからメールで放射能対策を教えてもらった。JPHMAから支援物資が届いたときは「会員達が涙しながら物資を受け取った」と報告。「日々の生活の中でインナーチャイルドを癒し、体質改善を図り、仲間とのつながりを大切にする。それが一番の対策」と総括した。仙台市の高橋阿津子さんは冒頭で「大会に来られなかった会員達の分も御礼を言わせてください」と心を込めて挨拶し、万雷の拍手を浴びた。震災直後は生きる希望も気力も失ったという高橋さん。由井会長が支援物資を持って訪問したとき、生きる気力を取り戻した。高橋さんは住民達にレメディーを無料配布して健康相談にのる一方、自らもレメディーを摂取。「津波の夢を見なくなった」と声を振り絞って話した。

宮古市田老町の実家が流された花巻市の梶山永江さん。現地で由井会長に「生き残った意味がある。何もなくなったが、命が残ったじゃないか」と励まされた。「そうだ、そうだ」と静かにうなずきながら聞いた梶山さんは「先生の言葉とホメオパシーに救われた」と胸中を明かした。今は田老町の母親達が結成した「手仕事の会」で、仮設住宅で暮らす独居老人の世話にあたる。被災地の会員達は、悲しみの淵から再生への道程を懸命に、魂を込めて進んでいる。

国際協力で可能性高まる

国際フォーラム開催

3日間開催された国際フォーラムでは、各国の知見・研究成果がJPHMAに集約し、新たな潮流を生み出す期待が示された。NPO法人自然科学研究所理事長・薬草学研究の小谷宗司氏は、放射能汚染の正しい評価の必要性と自らの抵抗力をつけることが大事であるとし、由井会長の発言を支持した。スットラー氏は「JPHMAは各国のトップレベルのデータを取り入れた」と評価。プラサンタ・バナジー氏は「日本のホメオパシーは世界のベストになるだろう」と予見した。ホメオパシーの社会的認知についても問題提起された。プラティップ・バナジー氏は政府にアプローチする手がかりとして「ホメオパシーは世界中で使用されている。科学的根拠があることを強調すべきだ」と提言した。酒向氏は「治癒経験を多く積むことが、ホメオパシーが認められる一番の近道」と見解を示した。ディミトリアディス氏は、日本のホメオパス達の症例報告について「治癒をしたケースこそ科学的根拠である。」と評価した。一方、由井会長は新たな国際機関の設立構想を発表。国際的連携はホメオパシーの質と可能性を高めることにつながると説いた。

由井寅子会長の発表要旨

由井寅子ＪＰＨＭＡ会長は「人間には本来の自分自身を生きる権利がある」と説いた

ホメオパシーで日本復興

自然に戻り、自分を生きる

東日本大震災には心を痛めました。現地に3回訪問し、多くのことを考えさせられ『ホメオパシー的信仰』を書きました。しかし人間はどんな苦難の中でも一縷の希望を持つことが大事です。私も親からいらん子と言われ、苦しい人生を生きてきましたが、その中で乗り越えられるからこそ苦難がくるのだという哲学を肝に銘じて生きてきました。

震災で多くの人達が無念の死を遂げました。その中で命を残してもらった以上、一生懸命生きることが私達の務めではないでしょうか。そして、この国に生きる私達が環境を守り、自然を大切にして、次世代に引き継がなければなりません。これを実現できるのが自然体に戻すホメオパシーだと思います。

私は静岡県に「ホメオパシーエコビレッジ」を建設する計画を立てています。自然住宅、自然エネルギー、自然農法、ナチュラルレストラン、学校、工場、病院、銀行などを結びつけたビレッジで、既に現地の農業団体に提示しています。

ハーネマンは最も治療が難しいのは医原病であると指摘しています。私は欧州に比べ40倍も抗生物質をとっている日本人を診てきて17年。その研究の中で日本人に合うように三次元メソッドを作って行きました。それにより、発達障害や複雑な医原病も治癒に導くことが分かってきました。自閉症などの発達障害の99名のアンケート中、約91％が改善しています。この改善は、9種のワクチンのコンビネーションのレメディーでした。ですから予防接種が自閉症を起こしている確率は高いと思わざるをえません。ホメオパシーは原因となったものを天文学的に水で薄め叩くことでその原因を取っていくという同種療法で成り立っている原理です。自閉症などの主な原因は予防接種であり、その害を取れるものは、ワクチンレメディーだったのです。

また、ホメオパシーは人間を心と魂と体の三位一体としてとらえ、心にも魂にも響くものです。自己卑下をし、自分の中のインナーチャイルドを癒すためにホメオパシーで解決できる手法があります。心の傷を癒し、人間として成長し、自分も人も許せるようになっていけます。人間にとって最も大切なことは「思いやりと愛」です。その境地に至るために私たちは何回も生まれ変わるのでしょう。苦しむ同志・同胞を助け助けられ、みんなで手を取り合い、自分自身の使命を全うしましょう。ホメオパシーの恩恵がすべてに降り注がんことを。万物生命、その存在自体に感謝し、命そのものを生きられんことを！